

*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No.23 2019*

日本語学習者における日本語漢字名詞産出時の出力形式の影響
－漢字圏学習者と非漢字圏学習者の比較－

中原 郷子・岩下 真澄

The Effect of the Output Form on Japanese Kanji Noun Production
by Japanese Learners:
A Comparison of Learners from Kanji Backgrounds and Non-Kanji Backgrounds

NAKAHARA Satoko, IWASHITA Masumi

長崎外大論叢

第23号
(別冊)

長崎外国語大学
2019年12月

日本語学習者における日本語漢字名詞産出時の出力形式の影響 —漢字圏学習者と非漢字圏学習者の比較—

中原 郷子・岩下 真澄

The Effect of the Output Form on Japanese Kanji Noun Production by Japanese Learners:

A Comparison of Learners from Kanji Backgrounds and Non-Kanji Backgrounds

NAKAHARA Satoko, IWASHITA Masumi

Abstract

Nowadays it is very rare to use typing as a way of learning in Kanji education. However, the learners who come to Japan as international students are often required to type their reports or papers in Japanese. Although knowledge of Kanji from other Asian languages may help students to write and understand Japanese Kanji correctly, it will not aid them in typing as a knowledge of the Japanese phonological information is necessary in order to input intended Japanese text. The purposes of the present study is to examine whether learned Kanji vocabulary can be recalled correctly or not by comparing the results of three types of output tasks: typing tasks, Kanji hand-writing tasks and Hiragana hand-writing tasks, and whether the vocabulary that learners can hand-write correctly can also be correctly typed or not. The results showed that (1) without regard to participants' native languages, the scores in the typing tasks and Hiragana hand-writing tasks were higher to Kanji hand-writing tasks, (2) in the Kanji hand-writing tasks, the test scores of learners familiar with Kanji exceeded those of the learners from Non-Kanji backgrounds and (3) for the learners from Non-Kanji backgrounds, typing tasks and Hiragana hand-writing tasks were easier than Kanji hand-writing tasks. These results indicated that an alternative method of typing training is necessary for learners who are familiar with Kanji. Also, learners new to Kanji might have an advantage in memorizing accurate phonological information of Kanji words.

キーワード 漢字教育, 日本語学習者, かな漢字変換

1. 問題と目的

国内で日本語を学ぶ日本語学習者の数は、年々増加している。文化庁が2019年に公開した「平成30年度国内の日本語教育の概要」によると、平成25年度に156,843人であった国内の日本語学習者は、平成30年度には259,711人となっており、わずか5年の間に約10万人増加している。日本語学習者のうち、大学や短期大学、専修学校などの高等教育機関および日本語学校などの日本語教育機関に在籍している留学生数についても、日本学生支援機構「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」によると平成30年5月1日現在、総数が298,980人となっており、日本語教育機関の学習者を留学生として調

査結果に含めるようになった平成26年度調査の184,155人と比較しても約1.6倍という大幅な増加を見せている。学習者の出身国（地域）に着目してみると、平成26年度（日本学生支援機構「平成26年度外国人留学生在籍状況調査結果」参照）の上位5か国（地域）とその割合は、中国94,399人（51.3%）、ベトナム26,439人（14.4%）、韓国15,777人（8.6%）、ネパール10,448人（5.7%）、台湾6,231人（3.4%）であったが、平成30年度調査では、中国114,950人（38.4%）、ベトナム72,354人（24.2%）、ネパール24,331人（8.1%）、韓国17,012人（5.7%）、台湾9,524人（3.4%）となっている。ここで注目すべきは、漢字が母語でも使用される漢字圏日本語学習者（以下、漢字圏学習者とする）である中国出身の留学生の割合が10ポイント下がっていることと、母語において漢字を使用しない非漢字圏日本語学習者（以下、非漢字圏学習者とする）であるベトナム、ネパール出身の留学生の占める割合が約10ポイント上がっていることであろう。このように、現在、国内の高等教育機関および日本語教育機関には多くの非漢字圏学習者が在籍しており、そのことに起因する日本語指導法の転換が昨今の日本語教育現場では喫緊の課題となっている。

ところで日本語学習者にとって漢字の習得は、日本語能力を向上させるために必須である。ブシマキナ（2013）ではJSL日本語学習者に対して漢字学習に関するアンケート調査を行い、その結果、漢字圏学習者も非漢字圏学習者も漢字が上手にならないと日本語が上達しないと考えており、母語を問わず漢字学習の必要性を感じていることが明らかになった。特に、日本での進学を目指す日本語教育機関に所属する留学生にとっては、日本留学試験や日本語能力試験の読解の得点に大きな影響を及ぼすと考えられるため、漢字の知識は必要不可欠である。すでに進学している留学生にとっても、漢字が理解・使用できるか否かは日本での生活や学習に大きな差異をもたらすことが推測される。しかし、文字の多さや字形の複雑さから、漢字になじみのない非漢字圏学習者にとって、漢字の学習は困難になることが指摘され（カイザー、1994; 野崎・市川、1997）、海保・Haththotuwa（2001）では非漢字圏学習者の漢字学習の問題として形が多彩であり、母語の文字と全く異なる形態的特徴を持つこと、形態・音韻・意味の関連が複雑であること、書字の際に、どの語彙を漢字で表記し、どれを漢字にしないかといった漢字の使い方が複雑であることを指摘している。実際、日本語教育現場では、覚えることの多さに圧倒され、漢字学習に強い困難さを感じ、日本語の学習そのものが滞ったり、やる気を失ってしまったりする非漢字圏学習者もいる。また、谷口（2017）は非漢字系日本語学習者が漢字を再生する際に困難となる要因を明らかにするために、初見の漢字を視覚提示後に手書きで再現する実験を行った。その結果、画数が多い漢字、画数が少なくても非直線的な漢字、画数が多く、非対称的な形態の漢字の再生が困難であることを報告した。さらに、漢字学習適性についてのビリーフ調査を行ったブシマキナ（2013）は漢字圏学習者、非漢字圏学習者ともに、漢字は非漢字圏より漢字圏出身者のほうが習得しやすいと考えていることを明らかにしている。確かに漢字圏学習者には母語としての漢字知識があるため、既有知識を利用した漢字学習が可能であり、漢字を見て理解することや漢字語彙の使用において、非漢字圏学習者より有利な立場にある。しかし、果たして漢字知識を持っていることが常に日本語漢字学習場面において有効に働くのであろうか。

また、日本語教育における漢字教育・学習を考える際には、昨今の文書作成の方法の多様化も考慮に入れなければならないであろう。スマートフォンやパソコンなどデジタル機器が普及した影響で、手書きで漢字を書く機会は減少しつつある。実際に日本語学習者80名と日本語母語話者38名に、どのような場面で日本語の漢字を手書きするか尋ねたところ、宿題をするときや授業中のノート、テスト、

メモといった回答がほとんどであり、レポートなどの作成は手書きではなく、パソコンを使用しているという回答であった。しかし、現在の第二言語としての日本語教育における漢字教育では、タイピングを組み合わせた教育はほとんど実施されていない。また、デジタル機器を用いた教育の実施を視野に入れた漢字学習アプリ等の開発は進められているが、デジタル機器を用いる学習者自身や外国語でのタイピング入力処理に着目した研究はほとんど行われていない。デジタル化社会に対応した漢字使用を支援するための教育を行う上で、アプリの開発とは異なる観点の一つとして、日本語入力によるタイピングを重視した漢字教育が必要であると考えられる。

既存の漢字教材を概観した小林（1998）は、日本語教育における漢字の授業での活動として、漢字知識を定着させる練習のほとんどが、「読み練習」、「書き練習」であることを指摘しているが、現在でも漢字教育場面では漢字を正しく手で書き、読むことに重きを置く活動が多く行われている。漢字を手書きで練習することは、漢字の形態、音韻の記憶に有効であることが日本語母語話者を対象とした実験で示されており（谷口、2003）、稲垣・藤田（2005）では、漢字学習方法として、書く、空書する、見るの3つを比較し、記憶成績の違いから、手の筋肉を使って書く行為を繰り返すことが外的リハーサルとして機能するため書いたり、空書したりといった手を使った練習が有効だと説明されている。しかし、記憶を符号化（情報に何らかの処理を施す段階）と検索（貯蔵されている情報から必要なものを取り出す段階）という側面から考えたとき、符号化時の文脈と検索時の文脈が一致していれば、それを手掛かりに検索しやすくなることが明らかになっている。これは符号化特定性原理（encoding specificity principle: Tulving & Thomson, 1973）と呼ばれているが、この原理に基づくと、手書きを目標とする漢字学習法としては、手書きによる練習、空書による練習は効果的であるが、タイピングを目標とした場合には符号化時と検索時の環境の一致が保証されず、手書きほどには効果が出ない可能性が示唆される。

先述のアンケート結果などから、実際に手書きが必要とされるのは、学習場面や申請書作成時に自身の住所等を記入するときなど、限られた場面のみである。一方、高等教育機関においてはレポートや論文、発表資料等は手書きではなく、パソコンなどを用いた文書作成が求められ、その際には多くの漢字語彙を使用する必要がある。現在の漢字教育では、タイピング学習は授業実施者が単発で取り入れることはあっても、体系的に学習する時間が十分に確保されておらず、学習者の独学に委ねられていることが多い。そのため、レポート作成時に表示したい漢字語彙を即座に変換できなかつたり、提出したレポート等に誤字やタイプミスが含まれていたりすることがある。このような現状を鑑みると、授業では漢字の形態や構成要素を理解、記憶するために手書き練習を行うことはある程度は必要であると考えられるが、キーボードを用いたタイピング練習も必要不可欠であろう。またこれは、単に日本語でタイピングすることに慣れるために必要なだけでなく、転移適切性処理（transfer appropriate processing: e.g., Morris, Bransford, & Franks, 1977）からも、その後のレポート等の作成に対して有効に働くことが予想されるからである。転移適切性処理とは、学習の段階で行った認知処理とテスト段階で行う認知処理の類似度が高ければ高いほど、記憶成績がよくなるという原理である。レポート作成はテスト段階とは異なるが、学習後の産出、つまりテストとして考えると、学習の段階からタイピングを取り入れていれば、漢字語彙を手書きで練習する際より、音韻情報に注意を払うことが予想され、学習場面との一致度から、手書きのみで漢字学習をした場合より円滑にパソコンなどを使った文書作成ができると考えられる。

漢字をタイピングで産出する場合、その漢字の音韻をローマ字表記でタイピング入力した後、候補漢字の中から該当する漢字を再認し、選択するため、漢字の正確な音韻情報が必須である。一方、漢字を筆記で産出する場合は、音韻の正確さは必須ではない。松見・費・蔡(2012)は、中級の中国人日本語学習者において、中国語の形態表象との共有・非共有、つまり、日本語と中国語で形態が類似しているか否かにかかわらず、日本語漢字単語の形態表象が中国語の音韻表象との間で強い連結が形成されているとし、日本語漢字単語はまず中国語で心的に音声化される可能性が高いことを示唆している。費・松見(2012)でも、中国語を母語とする日本語学習者が日本語の漢字単語を認知する際には、母語の漢字と形態が似ているため、その影響を排除することが難しく、それが漢字学習や処理を促進する側面もあるが、母語の音韻表象の活性化も促すので、中国語音で日本語漢字単語を読み、処理することの原因にもなると指摘している。また、小森(2005)は中国語、韓国語を母語とする日本語学習者を対象に、視覚呈示および聴覚呈示による日本語の文章理解における母語の単語認知処理の及ぼす影響について検討し、中国語を母語とする日本語学習者では、母語における情報処理が視覚情報に依存したものであるため、音韻情報への依存度が低く、第二言語である日本語の処理においても同様の方略が用いられることを明らかにした。

これらを踏まえると、漢字圏日本語学習者は習熟度が高くなっても、日本語の漢字語彙を見た場合、日本語音で音韻化していない可能性が高いため、手書きではなく、漢字をタイピング入力する際に変換したい漢字語彙をうまく表示・選択することに困難を来す可能性がある。

そこで本研究では、既習漢字語彙を用いた漢字のタイピング課題と2種類の筆記課題を行い、「知っている漢字語彙」がそれぞれの課題で正しく産出できるか、また課題間で産出の程度に違いが見られるか、さらに課題の遂行に母語による影響が見られるかを明らかにするため実験的調査を行った。

本研究における仮説は以下の通りであった。

- 1) タイピング課題では、語彙の日本語音の定着度の違いから、非漢字圏学習者の成績が漢字圏学習者より高くなるであろう(仮説1)。
- 2) 非漢字圏学習者では、既知語であっても漢字の形態の正確な筆記が困難であることが推測されるため、タイピング課題、ひらがな筆記課題の成績が漢字筆記課題より高くなるであろう(仮説2)。
- 3) 漢字圏学習者では、母語の漢字知識が利用できるが、語彙の日本語音はそれほど定着していないと考えられるため、手書きによる漢字筆記課題の成績がタイピング課題、ひらがな筆記課題の成績より高くなるであろう(仮説3)。

2. 方法

(1) 調査参加者

調査参加者は、日本の大学に在籍している中級以上の日本語学習者22名(非漢字圏12名、漢字圏10名)であった。中級以上としたのは、調査に使用する日本語語彙が既習であることを保証するためである。なお22名中、日本語能力試験N1合格者が2名、N2合格者が8名、N3合格者が5名、N4合格者が1名で未受験が6名であった。N4合格者と未受験の調査参加者については、在籍大学での日本語コースのプレースメントテストの結果によって振り分けられる日本語クラスが中級レベル以上であった

ため、中級程度であるとみなした。日本語学習歴は平均4.2年であった。非漢字圏学習者の母語の内訳は韓国語6名、ベトナム語3名、英語1名、タガログ語1名、スロバキア語1名で、漢字圏学習者の母語は全員中国語（北京語）であった。なお、韓国語母語話者は従来、中国、台湾、香港とならんで漢字圏学習者とみなされてきたが（海保，2002）、現在の韓国では漢字語であってもハングルのみで表記されることが一般的であり、生活の中で漢字を使う経験はあまりなく、自分の名前すら漢字で書けない若者が増えているという（文・伊藤・盧，2016）。この状況を踏まえ、本研究では漢字圏と非漢字圏を日常的に漢字を使うか否かで区別するため、韓国語を母語とする日本語学習者を非漢字圏学習者として分析する。

（2）要因計画

2（母語：漢字圏・非漢字圏）×3（出力形式：タイピング・ひらがな・漢字）の2要因配置で、第1の要因は参加者間要因、第2の要因は参加者内要因であった。

（3）材料

『げんきな絵カードI』（坂野・池田・大野・品川・渡嘉敷，2011）から、リーディングチュウ太¹の語彙判断レベルが旧日本語能力試験4級以上、漢字判断レベルが旧日本語能力試験4級以上の初級で学習する漢字名詞が本試行用として50語、練習用として5語、計55語が選定された。語彙・漢字レベルの組合せとその一例を表1に示す。

表1 調査に使った漢字名詞の語彙・漢字レベルの組合せと一例

		語彙レベル		
		4級	3級	2級
漢字レベル	3級	(n=10) 切手 地図 病院	(n=10) 試験 工場 音	
	2級	(n=10) 洗濯 財布 窓	(n=10) 失敗 連絡 相談	(n=10) 遅刻 観光 郵便局

なお、各グループの漢字名詞の文字数（漢字表記時）、拍数について1要因分散分析を行ったところ（本研究では有意水準を5%に設定した）、有意差はなかった（文字数： $F(9, 36)=1.05, p=.39, \eta^2=.12$ ；拍数： $F(9, 36)=2.04, p=.11, \eta^2=.15$ ）。よって、5つのグループは文字数、拍数において、ほぼ等質であるといえる。

（4）手続き

調査は小集団で、タイピング課題、筆記課題（ひらがな・漢字）、アンケートの順で実施された。タイピング課題と筆記課題の間には簡単な読解課題が行われた。タイピング課題では練習試行が5試行行われた後、本試行が2ブロック（1ブロック25試行）に分けて行われ、ブロック間に1分間の休憩が挟まれた。なお、表1の5つのグループはブロック呈示ではなく、ランダム配置されて呈示された。参加者は教室のスクリーン画面に呈示される絵が示す名詞を、次の名詞が呈示されるまでに手元のキ

ーボードを使ってタイピングし、個人用画面上で正しく漢字変換するよう求められた。絵の呈示には Microsoft PowerPointのスライドショー機能が用いられ、予測入力が機能しないよう調査者が事前に各端末の設定を行った上で課題を開始した。1 試行では準拠枠が3秒間呈示された後、絵の上部に英語訳が記されたスライドが15秒間呈示された。絵という媒体の特性上、多義的な解釈が可能であることが推測されるため、解答が多様なものにならず、絵の解釈を統一する目的で英語訳を付加した。筆記課題にはタイピング課題で用いたスライドをA4用紙に印刷したものをを用い、各イラストに対応する名詞をひらがなと漢字で書くよう教示された。アンケートでは未知単語の有無や調査参加者の日本語学習歴、タイピングの頻度、漢字を手書きする頻度、漢字を覚えるときに用いる方法などが尋ねられた。

3. 結果

本調査で用いた漢字名詞の漢字表記および読み方に未知語がある場合、該当するデータが分析対象から除外された(除外率5.18%)。全体の平均正答率および標準偏差はタイピング課題が81.09% (10.65)、ひらがな筆記課題が72.09% (19.60)、漢字筆記課題が53.09% (25.94)であった。母語別の各課題の平均正答率および標準偏差は表2のとおりである。

表2 母語別のタイピング課題と筆記課題の平均正答率(%)および標準偏差

非漢字圏 (n=12)			漢字圏 (n=10)		
タイピング	ひらがな	漢字	タイピング	ひらがな	漢字
83.88	73.33	34.17	77.75	70.60	75.80
(11.17)	(19.00)	(19.79)	(8.92)	(20.20)	(8.02)

各課題の正答率を角変換したものについて母語と出力形式の2要因分散分析を行った結果、母語の主効果が有意傾向であり ($F(1, 20) = 3.92, p = .06, \eta^2 = .04$)、出力形式の主効果が有意であった ($F(2, 40) = 15.47, p < .001, \eta^2 = .21$)。Ryan法による多重比較の結果、母語が漢字圏か、非漢字圏かにかかわらずタイピング課題とひらがな課題が漢字課題より正答率が高いことがわかった ($t(40) = 5.52, p < .001, r = .66$; $t(40) = 3.50, p < .005, r = .48$)。タイピング課題とひらがな課題には差がないことがわかった ($t(40) = 2.02, ns., r = .31$)。また、母語×出力形式の交互作用が有意であった ($F(2, 40) = 15.48, p < .001, \eta^2 = .21$)。単純主効果の検定の結果、漢字課題において漢字圏学習者のほうが非漢字圏学習者より正答率が高いこと ($F(1, 60) = 29.95, p < .001$)、非漢字圏学習者においてタイピング課題とひらがな課題が漢字課題より正答率が高いこと ($F(2, 40) = 30.35, p < .001$) がわかった。

4. 考察

本調査では、中級以上の日本語学習者を対象とし、日本語の漢字名詞を3種類の方法で産出する際の母語の影響について検討した。その結果、非漢字圏学習者において、タイピング課題、ひらがな筆記課題の正答率が漢字課題より高かったことから、仮説2は支持された。仮説1、仮説3はいずれも不支持となった。

本調査で用いた単語は全て調査参加者が「知っている漢字語彙」であることを前提としている。本調査の結果から、既習の漢字名詞のタイピングによる産出・ひらがな産出・漢字産出の出力形式の違いにより課題の成績に違いがあることが明らかとなった。手書きによる漢字産出では、漢字圏学習者のほうが非漢字圏学習者より正しく再生できていた。このことから、漢字圏学習者は母語の漢字知識を有効に用いて、呈示された絵とそれを表す漢字語彙の形態を日本語で正しく再生できていたといえよう。

一方、非漢字圏学習者は手書きによる漢字産出は正答率34%程度と、低い結果となったが、タイピングによる産出とひらがな産出はそれぞれ約84%、73%の正答率であった。このことから、非漢字圏学習者は絵に対応する漢字の形態を、手書きで正しく再生できるほど正確に想起することは困難であるが、正確な音韻を想起することは可能なため、候補として呈示された漢字語彙から意味的に正しいものを選択すること、つまりタイピングであれば、正しく漢字の産出もできていたといえよう。実際、非漢字圏学習者の1名は、漢字課題はすべて空欄であったが、ひらがな課題、タイピング課題ではそれぞれ76.0%、93.5%という正答率であった。これは、一般的に非漢字圏学習者は漢字学習において困難を感じ、漢字圏学習者に比べて漢字学習は苦手とすると考えられているが、それは手書きを目的とする漢字学習における非漢字圏学習者の特徴であって、漢字産出方法をタイピングにした場合は、その限りではないことを示している。

漢字圏学習者において、タイピング課題と漢字課題の正答率に差がみられなかったことから、冒頭で述べたような、漢字をタイピング入力する際に変換したい漢字語彙をうまく表示・選択することに困難を来す可能性について、本調査では指摘されなかったが、漢字圏学習者の母語の漢字知識はタイピングでは期待されるほど有効に働かなかったといえる。一般的に漢字圏学習者の漢字産出では、母語の漢字形態と日本語の漢字形態の差異が問題となることが指摘されている (e. g., 和田, 2002)。それに加え、本研究ではひらがな産出がほかの二つの課題より正答率が低い結果となったことから、既知であり、おそらく習得年齢 (Age of Acquisition : AoA) ²が早い語彙であったにもかかわらず、漢字の読みをひらがなで正しく表すことが漢字ほどはできていなかった。このことから改めて漢字圏学習者の特徴を考慮し、音韻とそれを文字化することにも十分な注意を向けて学習を行う必要性が示唆された。統計上有意な差はみられなかったので、記述統計の範囲を出ないが、タイピングによる産出とひらがな産出に関しては、非漢字圏学習者のほうが漢字圏学習者より正答率が高かった。このことから、手書きによる漢字産出においては漢字圏学習者のほうが優位にあるが、タイピングによる漢字産出では非漢字圏学習者のほうが漢字の日本語音が定着している分、漢字圏学習者より正しい産出ができる可能性があるといえる。以上を踏まえると、本調査の結果から、タイピングによる漢字産出を目指す場合は、学習方法と産出方法の一致のみならず、手書きの際とは異なる母語別の指導上の注意が必要であることが示唆された。

5. 今後の課題

本研究の結果を踏まえ、今後の課題として、語種や特殊拍の違いによる得手不得手を母語別に明らかにすること、およびタイピングを漢字教育に活用する具体的方法の提案が挙げられる。本研究でも、漢字圏学習者には長音の脱落が多く見られたが、ほかの特殊拍や拗音などを含む語が、直音のみから

なる語彙と異なるタイピング成績となるのか、また母語により、語に含まれる音の違いが産出にどのような影響を及ぼすのか明らかにすることが必要である。これらを明らかにすることで、タイピングを使った漢字教育を行う際に、留意すべき点が明らかになり、より効果的かつ具体的な指導法が提案できると考える。また、前述のように、タイピングによる漢字産出には正確な音韻情報が必須である。結果と手段を入れ替えて考えると、正確な音韻情報の習得のためにタイピングを学習手段として活用することは、漢字圏学習者の日本語漢字音の習得の一助となるのではないだろうか。この点については今後、未習語の学習なども利用してさらなる調査を行い、その学習効果を明らかにしたい。非漢字圏学習者に関しても、考察で述べた、漢字の形態の正確な想起は困難であるが、正確な音韻の想起は可能であり、候補として呈示された漢字語彙から意味的に正しいものを選択することができることを確認するため、同音異義語を用いた実験的検討などでさらに調査を行いたい。

以上によりタイピングを用いた漢字学習に理論的根拠を与え、具体的で、効果的な学習方法の提案が可能になり、第二言語としての日本語漢字教育に多少の貢献ができるものと考えられる。

注

- 1 日本語読解学習支援システム リーディング チュウ太 <http://language.tiu.ac.jp>
- 2 習得年齢 (Age of Acquisition: AoA) とは、学習者の言語発達過程において、その単語がどの時期 (年齢) で最初に学習されたかを表すものであり、多くの場合、母語話者である被調査者に一連の単語リストを呈示し、それぞれの単語について最初に学習したと思われる年齢範囲を7段階尺度や9段階尺度を用いて評定させて調査する (松見・羽瀧・邱, 2002)。

【引用文献】

- 坂野 永理・池田 庸子・大野 裕・品川 恭子・渡嘉敷 恭子 (2011). げんきな絵カード I イラストデータ版 [第2版] The Japan Times
- 文化庁「平成30年度国内の日本語教育の概要」
<http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/h30/pdf/r1408679_01.pdf> (2019年9月2日閲覧)
- ブシマキナ, アナスタシア (2013). JSL日本語学習者の漢字学習に対する意識: JSL日本語学習者へのアンケート調査を通じて 金沢大学留学生センター紀要, 16, 45-61.
- 費 曉東・松見 法男 (2012). 中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知—中日に言語間の形態・音韻類似性による影響— 教育学研究ジャーナル, 11, 1-9.
- 稲垣 紀夫・藤田 正 (2005). 漢字学習における書字行為に関する研究 教育実践総合センター研究紀要, 14, 47-54.
- 海保 博之 (2002). 漢字の指導 海保 博之・柏崎 秀子 (編著) 日本語教育のための心理学 (pp.111-121) 新曜社
- 海保 博之・Haththotuwa Gamage Gayathri Geethanjali (2001). 非漢字圏日本語学習者に対する効果的な漢字学習についての認知心理学からの提言 つくば大学心理学系紀要, 23, 53-57.
- カイザー, シュテファン (1994). 漢字神話と漢字学習—非漢字系学習者における漢字先入観について— 筑波大学留学生センター日本語教育論集, 9, 61-71.
- 小林 由子 (1998). 漢字授業における学習活動—認知心理学的モデルによる検討— 北海道大学留学

- 生センター紀要, 2, 88-102.
- 小森 和子 (2005). 第二言語としての日本語の文章理解における第一言語の単語認知処理方略の転移—視覚入力と聴覚入力の相違を中心に— 横浜国立大学留学生センター紀要, 12, 17-39.
- 松見 法男・羽瀨 由子・邱 學瑾 (2002). 第2言語の単語処理における単語の習得年齢の効果 広島大学教育学部紀要 第二部, 49, 163-170.
- 松見 法男・費 曉東・蔡 鳳香 (2012). 日本語漢字単語の処理過程—中国語を母語とする中級日本語学習者を対象とした実験的検討— 畑佐 一味・畑佐 由紀子・百済 正和・清水 崇文 (編著) 第二言語習得研究と言語教育 (pp. 43-67) くろしお出版
- Morris, C. D., Bransford, J. D., & Franks, J. J. (1977). Levels of processing versus test-appropriate strategies. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 16, 519-533.
- 日本学生支援機構「平成26年度外国人留学生在籍状況調査結果」
<https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2014/_icsFiles/afieldfile/2015/10/20/data14.pdf>
(2019年9月2日閲覧)
- 日本学生支援機構「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」
<https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/index.html> (2019年9月2日閲覧)
- 野崎 浩成・市川 伸一 (1997). 漢字学習支援システムの開発：漢字の構造理解と筋運動感覚の獲得 日本教育工学雑誌, 21 (1), 25-35.
- 谷口 篤 (2003). 漢字の再生に書字練習が及ぼす効果 中部学院大学研究科紀要, 4, 67-73.
- 谷口 美穂 (2017). 非漢字系日本語学習者の漢字再生を困難にする諸要因 日本語教育, 167, 1-14.
- Tulving, E., & Thomson, D. M. (1973). Encoding specificity and retrieval processes in episodic memory. *Psychological Review*, 80, 336-342.
- 和田 衣世 (2002). 中国人学習者向け漢字教材の必要性について 北海道大学留学生センター紀要, 6, 83-92.
- 文 楚雄・伊藤 隆司・盧 戴玉 (2016). 日中韓三か国における漢字教育の現状と課題 立命館産業社会論集, 51 (4), 13-34.

